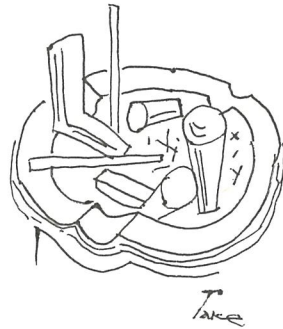


随 想



梅

紅梅

「わが庭の紅梅の花に雪舞へり 清美なるかな早春の譜は」

今日、三月二日の朝は牡丹雪で明けた。ふわりと大ぶりに結晶した淡雪である。純

上野いと子

白のヴェールをかぶった姿は、まさに、優雅な紅梅姫である。しかし、几帳の奥深き王朝の、たおやかなお姫様ではなく、天守閣そびゆる金城の、本丸に住み給う凛乎たる姫君であろう。現時ならば、紅梅色のセーター姿で、颯爽と高嶺の銀雪に、スキートをばす少女であろうか。

光のどかな陽春の花とちがって、雪に映く凛たる気品は、いかなる時にも、毅然として節操を守る、清純な処女であろう。

私は、息をひそめて、牡丹雪と、紅梅のみの占める独自の美しさに見入った。

白梅

三月十日、裏庭に來た鶯の初音を聞く。今日は陽ざしが柔かなので、久しぶりに庭に出て白梅を見てまわった。一概に白梅と言っても、花びらの白さは一様でない。紅をおびた白、青みをおびた白、黄をおびた白、また、その萼の色も、花びらの白さに応じてそれぞれちがう。神のみ業は、甚だ微妙にこまかく配慮されている。

若木の幹はなめらかだが、年輪の渦をたぐさん巻いた老樹の幹や枝は、大そうゴツ

年度位か）先とのことであつた。移築に際しては、柱や二階外縁廊下の手すりのベキは表面を削り取つて明治四年の当初のものが出るまでにして、その色彩で復元したとのことである。外縁廊下の床には一面石材が敷きつめてあるのがわかつたとのことでもあつた。二階は赤十字関係、一階はジェーンズ関係の記念に使うとのこと、その展示すべき資料面で同志社の協力を得た旨の御要望があつた。なお、先般、当編集所にて活字化したジェーンズの遺稿「Kumamoto」を荒木、鈴木両氏にお納め願つたが、大変喜んでいただけようである。以上がジェーンズ旧邸についてです。

また荒木氏より福田令寿氏（明治六年のお生まれ、明治三十五年同志社女学校・中学校講師、「百年史の証言」福田令寿氏と語る一参照）が数日前より遂にお耳がきこえなくなつた旨お聞きしましたが、三月下旬同志社本部より総長・理事長名で電報にてお見舞申し上げたとのことでした。

「時報」誌上をおかりして荒木、鈴木両氏に改めて御礼申し上げる次第です。

（同志社社史々科編集所職員）

ゴツして古雅である。されどふしぎなことに、若木の花も古木の花も同じである。私はハッとした。花に老若の差別はないのに老齡の人は、とかく、その生活に萎縮した花を咲かす。多年積み重ねた貴い体験と知恵を活用すれば、すばらしい名花を咲かせ得るであらうに……

人生の数々の苦杯を飲みほし、幾多の困苦を濾過して、あくのぬけた超俗の心境に至ったのに「老いの迷想」ゆえに、むなしく朽ちるのは、誠に残念である。人ごとではない、私自身、殆んど視力を失ってより十年、全く無為にすごした。やるせない心で、ま昼の陽に輝く梅を見ていると、ふと心底の螢火ほどの残火が燃えあがった。この微光をせめて六十ワットくらいに輝かせようと、八十路に近い私に、若き血がいきいきと湧き出でた。善は急げ、庭踏みをやめて、明窓のもとに、机の塵を払おうと、かぐわしい芳香を心にしめつつ、梅花に感謝深く「さよなら」を告げた。

(元女子中・高教諭)

犬のこと

猫のこと

河野 仁昭

京都市の北東のはずれにある国際会館は東側を除いて、三方は小山に接している。ただし、西側は池だ。池をへだてて小山がある。

会館が建つまでは、敷地とその東側は、湿地と雑草におおわれた空地だった。条件がよいせいだろう、人々は、よくここへ犬を捨てて来た。様子がすっかり変ってしまったいまでも、そういう人は跡をたためらしい。

南側の小山の東ふもとにあるぼくの町内など、その捨て犬で、随分迷惑している。

息子が幼稚園へかよったり、小学校へはいったころは、「今日も乞食の犬がいたよ」などと、帰ってきて報告するので、なんと

なく可愛げがあった。野犬を「乞食の犬」と呼ぶのは、発見だった。

いつか、息子の背丈ものびたが、捨てられた犬たちも大きくなった。最近では、群をなして白屋から町内をのし歩く。ごみ箱は片っぱしからひっくり返していく。暴力団のチンピラ顔負けである。小牛ほどもあるのが、どうやらボスらしい。野犬の群にも、ボスはいららしい。

さいわい、人に危害は加えないが、胡散臭げな眼で睨まれたり、夜など、後からぞろぞろついて来られると、背筋が寒くなる。「俺様の道を通るのに、一言のあいさつもないのかい」、そう言われている感じである。塾へ通っている娘は、「こわいから迎えに来て」と、近くの駅から電話をかけてくる。夜道を迎えに行く方も、おっかなびっくりである。

たまりかねて、妻に保健所へ電話をさせた。数日後、野犬狩りに来てはくれたが、そういう日にかぎって、小犬一匹あらわれない。掴まったのは、鑑札のない飼犬一匹だった。「匂いがするんやろなあ」と、娘は言った。たいしてふかくもない小山の、

どこへ潜んでいるのか。

今年の正月、ちょっと用もあって、久しぶりに知人のお宅へうかがったら、門へ出てきて尾をふっている二匹の犬が、以前いたのところが。毛並みは白く美しいが雑種である。以前も二匹いた。血統書つきのテリアのつがいだった。年寄りになって相次いで死んだところへ、この二匹が迷いこんできた。食べ物をあたえたら帰らなくなつたから飼っているのだと、ご主人はニコニコしている。

捨て犬は、たいてい雌である。子を産むと厄介なので、はじめから飼うまいと心に決めているばくなどちがって、鷹揚なものである。「捨て犬でしようか」ときくと、「いや、転勤する人が置いて行ったものでしょう」と言う。なるほど、そうして野犬になってゆく犬もいるわけか。どちらにしても、犬には人間にたいして恨みがあるろう。

数年まえ、アメリカの青年が、美人の奥さんと子供をつれて、絵の勉強にきて、ぼくの家の裏の借家に二年ほど住んでいた。一家がアメリカへ帰る日がきた。「しばらくハワイですこしてから、父の牧場があ

るカルフォルニアへ帰る。アメリカへ来たらぜひ立ち寄ってほしい」と、夫婦とも言い、「喜んでそうさせていたたく」と、ぼくはこたえて、別れた。別れて小一時間たったとき、青年はタクシーで引き返してきて、ぼくの顔を見るなり、「猫ノ」「猫ノ」と、叫ぶように言った。京都駅あたりまで行つてから、飼っていた猫をおいてきぼりにしてきたことに気づいたらしいのだ。

いっしょに探しに行ってみると、さいわい、猫はがらんとした茶の間に坐っていた。身のふりかたでも思案していたのか。「オー、オー」と、青年は抱きあげて頭をなぜながら、「これから、友だちの家へ行きます。引き取ってもらつてから、帰ります」と、相好をくずした。そして、「サヨナラ」と二度目の別れを告げて、あたふたと、待たせてあったタクシーの人になった。

猫は、どういう飼主を見つけてもらったのか。カリフォルニアの青年は、いまも年の暮れになるとクリスマス・カードを送ってくる。町内の捨て犬たちは、昨年の暮れから、なぜか姿を見せない。まさか冬眠でもあるまい。ごみ箱に石の重しをのせるな

同志社時報 第45号

読物

同志社のマークの意味

住谷 悦治

同志社生活56年の回想

田畑 忍

アイスホッケー部の想い出

瀧川 春雄

「小さな車」

村上菜々子

「校友・同窓が語る 同志社100周年への展望(4)」

文会 座談

随想・趣味探訪・その他

1部100円 年4回発行

ど、町内が自衛策をとったので、餌がたりなくなつて、どこかへ集団移動してくれたのだろうか。

(大学学生課長)

新島襄は

どこへ行った

和田 洋一

もう四年前のことであるが、『同志社時報』第29号に掲載されていた「同志社への二三の苦言」という文章を読んで、いいことを言ってくれているなあと感じた記憶がある。

最近、読みなおしてみても、もう一度感心したが、しかし今度は感心しているだけではすまされなくなった。せっかくの苦言がこの四年間、同志社によって生かされず、黙殺されたままになっているからである。

「苦言」を呈した岩田英彬という人は、毎日新聞京都支局、大学担当の記者で、私は今までどこかでお目にかかっているかと思うが、お顔は目の前にうかんでこない。岩田記者は、同志社の卒業生ではない。し

かし同志社の建学の精神がしだいに見失われようとしているのを憂いながら、「土著の思想」がもっと大切にされねばならないのではないか、新島襄についての学校側のPRが充分とは言えないのではないか、と語っている。そしてさらに、新島旧邸などは日常、開放して、少なくとも同志社の学生がいつでも見に行けるようにすべきだろう、学校の一隅に記念室なり、記念館を設け、そこに行けば、新島襄の一生がわかるような設備も作るべきである、と具体的な提案をしている。

私は、自分のもっているゼミの学生たちを、卒業の直前、新島旧邸に集め、新島襄の話をしたことが今までに三度ばかりあるが、ただそれだけのことで、岩田記者の提案にはまったく賛成であった。同志社当局がいくら財政難に苦しんでいるとはいえ、これはたいしてお金のかからないことである。学外からのせっかくのアドバイスを生かして、学校当局が実行に踏み切ってくれることを私は期待したが、期待はみたされず、私自身も、当局に向って働きかけられる熱意を示さなかった。

少年のころ、私は同志社中学で学んだ。父が同志社の教師であったということも加わって、新島襄の名前は、私の耳にしばしばはいった。はいり過ぎた、という方があるいは正確だったかも知らない。「また新島先生」、「また新島精神」、私はわずらわしいとさえ思った。戦後になってからも、最初の数年は、何か事があると新島襄の名前がもち出されてきた。しかし大学の学生数がふえ、教職員の数がふえるに反比例して、新島襄について語られる度合いは、すくなくなくなっていき、新島が同志社を打ち建てた精神は、しだいに稀薄になっていった。ここ二、三年、同志社の創立者は、もうどこへ行っただか分らないというのが現状である。戦後、同志社大学を卒業し、現在教職員として同志社に勤めている人びとが、ほとんど新島襄について知らないのであるから、よその大学から来た人たちはなおさらのことである。私のように、同志社大学を卒業してはいないとはいえ、古くからの因縁によって同志社とつながっている者の責任を、昨今改めて感じさせられているしだいである。

(大学文学部教授・新聞学)